

○年代

1962年6月に新潮社から出版され、英語・チェコ語・フィンランド語・デンマーク語・ロシア語等の二十数ヶ国語で翻訳された。1963年、第14回読売文学賞を受賞。1968年、フランスで最優秀外国文学賞を受賞。本作は、1960年9月の同月号文藝界に発表された短編小説『チチンデラ ヤパナ』を長編化したものである。

○舞台

山形県酒田市付近の砂丘
冒頭に出てくるS駅は、サカタ駅と思われる。

yahoo! 掲示板 安部公房 "現実、安部公房に追いつく?"(hirokd267氏の発言)より引用

——引用開始——

公房が見たという週刊誌、酒田市砂丘の集落でで傘を差して食事をしている写真は、その後どの週刊誌であったか、確認されてないそうですね。(宮西忠正「安部公房・荒野の人」菁柿堂による)

——引用終了——

公房が、週刊誌の砂の写真に触発されたというエッセイがある。(モチーフの発見[全集016]、『砂の女』の舞台[全集022])

なお、宮西氏は安部公房全集の編集者

また、映画のロケ地は、浜岡原発で有名な静岡県浜岡町。(全集018の作品ノート)

○チチンデラ ヤパナ

『チチンデラ ヤパナ』では、主人公は会社員の設定で、「砂の女」を殴る展開になるが、『砂の女』では教師の設定で、「砂の女」を殴らない。

○民法30条

現実の民法30条も失踪に関するものである。

○全集トリビア

「砂の女」の前の題は、「通りかかった男」だった。(全集015の作品ノート)

○安部作品における位置づけ

安部公房の代表作の一つであり、この作品から安部公房の作品を深く知りたいと思った方は多数おられると思います。難解な表現はあまりなく、むしろ平易な文体。それでいて、知恵の輪のような、複雑な対立構造を描く手腕には脱帽します。

○私個人の読書体験、交流体験

私個人の体験から言うと、新潮夏の100冊に載っていた作品だったというそれだけの理由で読んで、天地がひっくり返る思いのした作品。それ以来、安部公房の作品を追いつけているが、一向にその差は縮まらず、逆に安部の方から追われている気分になる。

しかし、安部MLやホームページやブログやhirokd267さんの掲示板に出会うなど、色々な出会いがあって、本当に良かったなと思っています。